

■視覚支援校における実践事例

自分で読みたい本を選択できることは 読書の大きな喜び

東京都立久我山青光学園視覚障害教育部門
名取 恵津子



視・知併置の新しい学校

東京都立久我山青光学園は、2010年（平成22年）に、久我山盲学校と青鳥特別支援学校久我山分校が一つになり、視覚障害教育部門と知的障害教育部門を併置する学校として新たに設立された学校です。校舎はそれぞれの部門ごとに分かれています。

視覚障害教育部門の教育内容は、久我山盲学校時代と大きく異なることはありません。知的障害教育部門（小学部・中学部）の児童・生徒数157名に対して、視覚障害教育部門（幼稚部・小学部・中学部）の幼児・児童・生徒数は46名とこじんまりしていますが、楽しい笑い声が響くにぎやかな毎日です。視覚障害教育部門には寄宿舎もあり、小学部・中学部の子どもたちがここで生活しています。

多様化する子どもたちの実態

盲学校はどこも比較的少人数の学校が多いのですが、その障害は多様です。中には視力の矯正は難しいものの、ある程度視力を活用できる生徒もいます。今回のマルチメディアDAISY図書の利用については、このような子どもたちに有効なのではないかと考えました。

そこで、全校に利用を呼びかけ、その様子を利用記録票に記録しながら、活用法を考えていくことにしました。今年度の新転任の教員には研修で紹介する時間がありましたが、全体での研修の時間はとれませんでした。

「自分で選ぶ」「お話がわかる」喜び

今回は実際にわいわい文庫を利用した生徒の中から、Aさんの事例と、寄宿舎での利用の様子を報告します。

中学部1年生のAさんは知的障害が

ありますが、視力を活用することができます。ひらがなの読み書きができ、カタカナも練習中です。

絵本を一人で読みとおすことはできません。また、読み聞かせを聞くことにもあまり積極的ではありませんでした。しかし、パソコンを一人で起動することができます。

国語の授業の中で、わいわい文庫を利用してみました。『おおきなかぶ』『わにさんどきっ はいしゃさんどきっ』『11ぴきのねこ』『やおやでおかいもの』などを読みました。利用に慣れてくると、Aさんは「どれにしようかなあ」と言いながら、自分でお話を選ぶことができるようになりました。いま

読まれている部分が黄色く反転するのでわかりやすく、画面を一生懸命見て、いっしょに声に出して読むようになり、最後まで読みとおすことができました。

自分で読みたいものを選択することができるのは、読書の大きな喜びであると言えます。また、一人では文字を追うことができない生徒でも、音声があることや画面の反転によってどこを読んでいるかがわかり、耳と目の両方から情報が入ることで、何が書かれているかについて理解しやすくなるようです。パソコンを使うという点も、いまの子どもたちにとっては、意欲を高めることにつながっているように感じました。



読書を楽しもうと、わいわい文庫のディスクをパソコンの本体に入れて準備しているところ

寄宿舎での利用

今年度(2012年度)、寄宿舎には30名の子どもたちが入舎しています。1週間ずっと泊まっているわけではなく、週に1～2泊するケースが多いです。

残念ながら、寄宿舎には子どもたちが使えるパソコンがないので、こちらは画像のないDAISY図書として利用した実践の報告です。

放課後の活動は、授業中よりも子どもたちが自由に利用できる部分も多く、その反応もさまざまでした。就寝前に布団の中で横になって『チモとかしこいおひめさま』を聞いた子どもは、「かしこいね」と言いながら、よく聞いていたそうです。

ただ、録音図書の場合、直接読んでもらうのに比べると、抑揚や強弱が少ないという点が、メリットにもデメリットにもなってきます。とくに小さい子どもの場合、読み方に感情がこもっているほうが、お話に引き込まれていきやすいという面はあります。

また、子どもたちは、再生機の操作音に少なからず興味を示します。知的障害があり、こだわりの強い生徒の中には、お話の内容よりも操作音に強くひかれて、同じ操作を繰り返したり、音量や声の高さを変えて音を楽しんでいる人もいました。とはいえ、お話を全く聞いていないわけでもなく、気に入ったフレーズを発見して、よく覚え

て口にしたりもします。

DAISY図書は初めてという子どももまだ少なくありませんが、逆に携帯型の再生機を自分で持っていて、サピエ図書館*を検索して気に入ったDAISY図書のデータをダウンロードして聴くなど、日常的に活用している子どももいます。放課後の自由な活動、余暇の楽しみとして、DAISY図書の活用を視覚障害のある子どもたちに広げていきたいところです。

また、学年が上がってきたら、自分で調べたり、関心のあるテーマの資料を読むことなどにも活用の幅を広げていければと思います。

おわりに

——本と子どもを結ぶ役割の大切さ

盲学校は子どもの人数が少なく、障害の実態も多様なことから、マルチメディアDAISY図書を有効に活用できる人が少ないのが実情です。けれども、Aさんのように、視力が活用でき、少し文字が読める子どもにとっては、読書や学習への意欲を高め、内容を理解するのに大きく役立ちます。ニーズのある人にはとても有効な方法と言えるでしょう。大切なのは、多様な子どもたちの中からこのようなニーズをいかに掘り起こせるかという点にあるように思います。

教職員や保護者の間でも、まだ

DAISY図書は十分に浸透しているとはいえません。DAISY図書はかつてのテープ図書にかわる（さらに優れた機能が加わっていることはいうまでもありません）録音図書ですから、特別な機械ではなく、だれでもがもっと気軽に使えるようにしておきたいものです。

点字が読めない子どもたちに、物語のテープ図書を貸し出したり、教職員が少しの時間に絵本をちょっと読んであげたりしてきたのと同じ感覚で、DAISY図書を扱うことができるように、何度か研修の機会が必要だと感じています。寄宿舍で子どもたちがパソコンを使える環境も、整えてあげたいところです。

また、小さな子どもや知的障害のある子どもたちなどには、適切なアドバイスも大切です。お話の長さや難しさなど、それぞれの子どもにあったものを選んで渡すことも必要です。慣れないうちは再生機の操作もサポートが必要ですが、こちらはいまの子どもたちのほうが飲み込みが早いかと思います。

ごくあたりまえのことですが、「人」のサポートが大切ということです。DAISY図書と子どもたちを、あるいは本と子どもたちを結ぶ「人」がいれば、活用の幅はさらに広がっていけると思います。

* サピエ図書館

<https://www.sapie.or.jp/>